

## 紹介 許憲春著 作間逸雄監修 訳者代表李潔 『詳説 中国GDP統計 - MPSからSNAへ - 』

|     |  |
|-----|--|
| 著者  | 野上 裕生  |
| 権利  | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア<br>経済研究所 / Institute of Developing<br>Economies, Japan External Trade Organization<br>(IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a> |
| 雑誌名 | アジア経済  |
| 巻   | 51   |
| 号   | 2  |
| 発行年 | 2010-02  |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所   |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2344/00007120">http://hdl.handle.net/2344/00007120</a>  |

許憲春著 作間逸雄監修 訳者代表李潔

『詳説中国GDP統計  
——MPSからSNAへ——』

新曜社 2009年 vii+330ページ

の が み ひろ き  
野 上 裕 生

本書は、国際連合のSNA (System of National Accounts) に準拠した国民経済計算を中国で作成する作業の指揮を担った著者・許憲春 (シュエイ・シェンチュン) 氏の著書に、1999年から2003年までの研究成果の一部を加筆・修正の上、再構成したものである。開発経済学において国際機関の作成した統計データを利用した研究が盛んに行われているが、開発途上国の経済統計にある具体的な問題点を学習する機会は意外に多くない。またマイクロ経済学やゲーム理論の最先端の理論が解説される割には、国民経済計算の読み方・使い方を学習する機会もあまり多くないと思われる。しかし「発展水準の評価にはなにが適切か」、「財政赤字や国際収支の赤字がなぜ問題なのか」といった問題を理解する上で、国民経済計算の理解は不可欠である。このような中で、開発経済学でも特に注目を集めている中国の国民経済計算をわかりやすく解説した書物が公刊されたことは、経済統計の分野だけでなく、開発経済学や現代中国研究にとっても重要な収穫だと言えるだろう。特に中国の経済統計の信頼性に関するメディアでの報道が注目される中で、中国の国民経済計算作成の当事者による実情に即した解説が読めるようになったことの意義は非常に大きいと思われる。

本書は著者が執筆した16の章に14の「訳者コラム」、それに国民経済計算で重要な10項目に関する「訳者解説」から構成されている。評者が特に関心を持ったのは、中国の公式GDP統計に対する世界銀行や外国の研究者 (たとえばアンガス・マディソンやトーマス・ロースキー) の批判に対する許氏の反批判 (第2章、第7章)、旧ソ連・東ヨーロッパの経済

指標であったMPS (A System of Material Product Balances) では軽視されてきたサービス業に関する問題点を解説した部分 (第12章、第15章)、不変価格表示の産業別付加価値を推計するデフレーターの問題点を解説した部分 (第6章、第12章)、地域経済計算に固有の問題点を解説した部分 (地域の要素所得の流出・流入の扱いや貸借対照表作成上の困難など。第8章)、1990年代の中国の資金循環統計を分析し、この期間、国民総貯蓄が総資本形成を上回り、資本不足よりは資本余剰があることを示した部分 (第14章) である。

また本書後半にある「訳者解説」および本書の各章に付随する「訳者コラム」はこの分野の専門家による国民経済計算への要領良い入門にもなっている。評者にとって特に参考になったのはcolumn 10で紹介されている中国の経済統計の公表形式の問題 (たとえば先進国に比較してGDPデータが早く公表されるので、統計に対する信頼性を損なっている面があること、GDP統計の公表で国家统计局幹部が記者会見でデータを説明することで透明性を確保しようと努力していること)、column 13で解説されているFISIM (「間接的に計測される金融仲介サービス」という意味で、93SNAでの規定では「参照利子率」という概念を用いて金融業の産出を部門間に配分する方法) を日本で採用することをめぐる政府・専門家の間でのやりとりの紹介 (240ページ)、およびcolumn 14でのFISIM配分の中国のGDP統計での利用の現状 (252~253ページ) の紹介などである。また「訳者解説」では日本と中国の経済センサスの比較において経済センサス年と中間年のGDP統計の精度の違い (ベンチマーク年調査の精度と年次推計の精度の違い) と経済発展段階の違い (インフォーマルセクターが経済活動全体に占める割合の違い) を考慮すべきであることが指摘されているのも興味深い (298~303ページ)。本書が中国経済の入門書として、また開発途上国の国民経済計算の学習書として広い範囲の人たちに読まれることを希望したい。

(アジア経済研究所開発研究センター)